

援助行動経験が今後の援助行動に 及ぼす影響について

松 浦 均*

問 題

いわゆる「人助け」の行動は、社会心理学の領域のなかで「援助行動」として対人的相互作用のひとつと位置づけられている。ただし「援助行動」と一口にいても様々な種類があり、その幅もきわめて広い。たとえば緊急事態や災害状況といった緊迫した場面での人命救助の行動もあれば、道案内や電車の中で座席を譲るといったごく日常的な小さな親切行動もある。そういった援助行動の多くは偶発的にそのような場面に遭遇するものであるが、誰でもそのような場面を何度か経験したことがあるであろう。しかしながら、そのような場面で果たして援助の行動を起こしたかどうかとなると、いろいろな事情や状況的な制約から援助をした方がよいことはわかっている、その時はしなかったという経験も案外多いのではないか。要するに援助行動を起こすべき状況や場面に遭遇する経験と、そこで援助行動をしたという経験は別の問題なのである。

援助要請があって援助すべき場面でも、援助をしないことは確かにある。つまり援助の行動に入る前に援助行動に対して後ろ向きになったということである。援助行動研究の契機となったキティ・ジェノビーズ事件をもとに明らかにされた傍観者効果 (Latané, B & Darley, J. M., 1970) など援助をしない理由を説明するものである。また高木 (1987) は援助の動機や理由の

*人文学部助教授—社会心理学

研究に続いて、非援助の動機や理由についても26項目を挙げ、これを5つの因子構造に分解している。すなわち「援助規範からの意図的な逸脱とそれに伴うサンクションの軽視」「援助または被援助の好ましくない経験」「援助者と被援助者の好ましくない人格的な特徴」「援助責任の分散」「援助能力の欠如」である。また松井（1989）は、思考や感情を中心とした認知的判断にもとづく援助の生起過程モデルを提唱しているが、当然そこには、思考の過程を経て帰結として援助の行動をしないとするパスも想定されている。その他の抑制要因と考えられるもの（援助状況に入る前の主に援助者側の特性としての要因）として「対人関係理解の不足」「対人行動スキルの不足」「状況把握力不足」「冷淡なパーソナリティ」「他者との相互作用を忌避する傾向」「共感性、思いやりの感情、道德観、倫理観といったものの欠如」などが挙げられる。

ところで、このように援助行動を起こさない理由はいろいろと考えられるが、いずれの研究も、実際の場面で援助を起こす人がいったいどのくらいいるものなのか、逆に援助をしない人がどのくらいいるものなのか、そういう観点についてはとくに言及されてはいない。その場で援助行動を起こすかどうか、起こしやすいかどうかについては、その時の状況判断とは別に、先の高木（1987）による非援助理由の中の「援助または被援助の好ましくない経験」が示すように過去の援助体験が次の援助行動に影響を及ぼしている可能性がある。つまり、ある援助行動をすべき場面で一度でも行動を起こすと、それが援助経験となって、次回に同様類似の場面に遭遇したときにも援助行動に至るもろもろの状況判断の過程は短縮されて援助が決定されやすくなり、反対に、最初の機会に非援助を決定すると回次の同様類似の場面でも援助が生起しにくいと考えられるのではないだろうか。

いずれにせよ援助経験が次回にどのように活かされるかということについては、もう少し詳しく考える必要がある。たとえば、最初の援助行動がうまくいった場合は、そのことが次回も同じようにやればうまくいくという根拠あるいは自信となる可能性があるが、最初の援助行動で失敗してしまった場合は、回次の場面で同じようにやれないことから、回次の場面では改めて援

助行動を行うかどうか検討を要することになる。失敗経験は次回の行動を抑制させる方に働く可能性が高く、援助経験が良い循環をもたらすかどうかは、最初の援助行動の内容結果が成功したかどうかという自分の認識にかかっているといえる。これについては高木（1997）によって「援助効果」として定義づけられている。これは援助者が自分の与えた援助によって被援助者の問題がどの程度解決されて、被援助者の窮状が緩和されたかについての自己評価の指標である。自分の行った援助を高く評価していれば、援助に対する積極的な動機づけに結びつくと考えられている。この考え方にもとづいて、本研究では、援助行動の経験とその援助効果が今後の援助行動場面でどのような影響を及ぼすのか検討することを第1の目的とする。

本研究では、さらに援助行動の生起に関わる概念的な変数として「社会的スキル」を考えてみたい。昨今の社会的な対人相互作用において、社会的スキルの有無はよく取り上げられるところであるが、援助すべきかどうかの場面では、相手が見ず知らずの者であれば、そのことにより対人的な関係性を始動させねばならなくなる。つまりその場において自分と他者との行動的なコンタクトから始まるわけで、いざ援助行動が開始されとなると、心理的な過程と連動しながら具体的に声をかけて問題解決的な行動をすることになる。そのような相手との相互作用の初期段階で影響する変数として「社会的スキル」を想定する。すなわちスキルがあれば援助行動に入りやすいが、スキルがない人は援助行動を行わない、あるいは回避する傾向があるのではないかと考えられる。このあたりの関連について検討する。

最後に、援助行動生起に関わる心理的要素として従来考えられてきた「共感」や「同情」といった概念（Eisenberg, N. & Mussen, P. H., 1989）があるが、本研究では、角田（1994）による共感経験尺度（改訂版）を用いて「共感経験」と「共感不全経験」を測定し、援助の際の共感の経験と援助行動との関連を検討する。

方 法

調査対象 C大学人文学部とD大学工学部の学生計191名。内訳は男子118名、女子73名。学年は1～4年。

調査期日 平成14年7月。調査は双方の大学で開講している筆者の心理学の授業時間に実施した。所要時間は20分程度であった。

調査内容

1. まず12種類の援助行動カテゴリーについて以下の質問をした。これらは種々の援助行動の類型研究からおもだった12種類の援助行動を選んだもので、その際、いわゆるボランティア活動の範疇の援助的活動もこの中に加えることにした。できるだけ幅広く事例を想起してもらうために、たとえば「国内外向けの募金活動または集金活動」といったように一般的で概括的な記述にした。

①12種類の援助行動カテゴリーにおける経験をたずねた。経験がある人に対しては、どのような事例か差し障りのない程度に具体的に記述させた。

②各援助行動カテゴリーについて「援助経験有り」の人に対して、援助効果をたずねた。（ほぼ完遂・不十分・失敗・効果不明の4種から選択）

③各援助行動カテゴリーについて「援助経験有り」の人に対して、再度の状況での援助意思をたずねた。（援助する・たぶん援助する・たぶん援助しない・援助しないの4段階の評定）

④各援助行動カテゴリーについて「援助の経験なし」の人に対して、新規の状況での援助意思をたずねた。（援助する・たぶん援助する・たぶん援助しない・援助しないの4段階の評定）

⑤②の「援助経験あり」の人について「不十分」「失敗」と回答した者に対してその理由をたずねた。その際、予め用意した22種類の理由から該当するものを選択。複数回答可とした。

⑥③の再度の援助意思で「たぶん援助しない」「援助しない」と回答した者に対してその理由をたずねた。⑤と同様の22種類の理由から該当するものを

選択。複数回答可とした。

⑦④の新規の援助意思で「たぶん援助しない」「援助しない」と回答した者に対してその理由をたずねた。⑤と同様の 22 種類の理由から該当するものを選択。複数回答可とした。

2. 社会的スキル尺度 菊池章夫 (1988) による社会的スキル尺度青年版 (Kiss-18) の 18 項目を用いた。

3. 共感経験尺度 角田 (1994) による共感経験尺度 (改訂版) の 20 項目を用いた。下位尺度は共感経験 10 項目、共感不全経験 10 項目である。

結果と考察

1. 援助行動の経験について

12 種類の援助行動について、その経験状況ならびに次の機会における援助意思を Table 1 に示した。

被調査者全体の援助経験延べ数は 1,073 件であった。それに対して未経験延べ数は 1,214 件であった。想定された全件数のうち、経験延べ数の割合は 47.3%で経験率は半数弱ということになる。一人あたりの援助経験数は 12 類型中の 5.86 件ということになる。なおすべての種類について未経験の者は 5 名、もっとも多くの種類の援助を経験している者は 10 種類の援助行動を経験していた。

経験率の高かった援助行動は、順に「援助類型 12：友人知人の相談に乗るなど精神的支援、サポート行動」「援助類型 10：小さな親切(道案内、拾得物届け出等)」「援助類型 8：小物の貸与、分与」「援助類型 6：地域ボランティア活動(環境美化、清掃奉仕等)」であった。反対に経験率の少なかったものは、順に「援助類型 7：事故状況でのけが人の介抱、救急手配、関係者への連絡等」「援助類型 3：地震、洪水等の災害救援、復旧、搜索等のボランティア活動」「援助類型 4：入院療養中、自宅療養中の人などに対する看護介護活

Table 1 援助行動の種類とその援助に関する経験率、および次の機会における行動意思について

援助行動の種類	経験率	経験
	(経験者/ 全体)	有り
類型1 国内外向けの募金活動または集金活動	0.419	80
類型2 国内外の災害、難民救援に関する物資援助、人的援助	0.209	40
類型3 地震、洪水等の災害救援、復旧、搜索等のボランティア活動	0.126	24
類型4 入院療養中、自宅療養中の人などに対する看護介護活動	0.137	26
類型5 老人ホーム、児童施設等の福祉施設慰問、訪問ボランティア活動	0.330	63
類型6 地域ボランティア活動（環境美化、清掃奉仕等）	0.670	128
類型7 事故状況でのけが人の介抱、救急手配、関係者への連絡等	0.084	16
類型8 小物の貸与、分与	0.850	159
類型9 業務における代役、代行	0.487	93
類型10 小さな親切（道案内、拾得物届け出等）	0.853	163
類型11 労力、労働の提供（重い荷物運搬手伝い等）	0.592	113
類型12 友人知人の相談に乗るなど精神的支援、サポート行動	0.880	168

動」「援助類型2：国内外の災害、難民救援に関する物資援助、人的援助」であった。経験率の少ない類型は、偶発性に左右される緊急事態に関わるものを中心であり、その意味では当然の結果である。経験率の多いものでは、友人知人の相談に乗るといった行動は、これもまた大学生を対象にした調査ゆえの結果と考えられる。

2. 援助効果について

先に述べたように、これは自己の援助を振り返って、援助が成功したかどうかに関する自己評価の指標である。したがって経験事例がその対象となる。これらの結果の詳細は、やはり Table 1 のなかに示されている。

経験時の状況				この援助についての 今後の行動意思				経験	この援助についての 今後の行動意思				援助経験有 無による次 の行動の前 向き後ろ向 きの比率の 差
完遂	不十分	失敗	効果 不明	援助 する	たぶん 援助 する	たぶん 援助 しない	援助 しない	なし	援助 する	たぶん 援助 する	たぶん 援助 しない	援助 しない	カイ 2 乗値
36	5	0	39	18	55	5	2	111	14	60	20	17	15.85***
16	1	0	23	15	22	1	2	151	33	79	21	16	5.66*
11	2	1	10	7	16	1	0	167	45	81	24	16	4.92*
16	5	0	5	15	10	0	1	164	27	71	32	33	12.8***
40	10	0	13	18	39	4	2	128	15	50	33	30	28.83***
86	17	1	12	34	75	10	9	63	14	28	8	12	7.68**
9	3	1	3	11	5	0	0	175	90	67	10	8	1.82n.s
115	13	4	27	66	73	10	7	28	7	8	3	10	21.9***
61	15	0	17	26	50	9	4	98	15	42	11	30	16.46***
113	11	5	32	104	49	5	1	28	11	9	6	1	16.83***
91	8	1	13	57	44	1	6	78	26	38	2	10	4.03*
63	37	5	63	52	72	35	7	23	8	10	2	3	0.14n.s

被調査者全体の経験事例に関して、その援助効果は、自分の行った援助を肯定的に評価している割合は61.2%、逆に否定的に評価をしている割合は13.5%であった。援助がどのような結果になったか効果不明とした割合は25.3%であった。この「効果不明」については、「募金活動」や「物資提供」などの援助行動で顕著であった。これについては、募金や物資提供を行った時点で本来は援助完遂と考えてもよいものであるが、これらの行動は実は募金が実際にどう使われたのかは寄付をした者にはわからない場合が多く（日本赤十字社などは募金の使途報告を公表しているが目に触れることは少ない）、寄付をしてもその使途が最初からまったく不明のようなものは、募金活動に対する援助そのものを回避する傾向がある（松浦、1990）。募金活動など

は日常的で簡便な援助活動であるが、今回の調査でも援助経験率がそれほど高くない理由として、効果不明だからとするものが実際にあった。募金活動や物資の援助活動は、援助窓口と実際の援助活動現場が離れており間接的な援助である。募金や物資がどのように使われるかわからないということで「効果不明」であり、そのことがまた援助を生起させないことにつながっていることを示唆している。

ところで、援助経験事例の援助効果については「効果不明」を除いて、3段階の評定値としてその指標とした。その結果、すべての事例における援助効果の平均値は2.81で、標準偏差は0.430であった。この結果から、被調査者が、自分の行った援助行動についてはきわめて高い援助効果を認識していることがわかる。延べ実数では「失敗経験」も多く出されているが、経験した援助のほとんどは「成功した」と認識していた。

3. 援助行動経験の有無と次回の援助場面における行動意思について

各援助行動での経験が次回の同様な援助場面にどのような影響があるのか検討するため、援助経験の有無と次回の援助意思の関係をみた。これらの結果もTable 1に示されている。

将来同様の場面に遭遇した場合の援助行動意思は、「援助の行動をする」から「援助しない」までの4段階の評定尺度としてたずねた。実人数についてはTable 1のとおりである。

それぞれの援助類型について援助経験者と未経験者とで、次回の援助行動意思に違いがあるのかどうか、援助意思における「前向き（次回も「援助する」と「たぶん援助する」の合計）」と「後ろ向き（次回に「援助しない」と「たぶん援助しない」の合計）」の人数比率について χ^2 検定を行った。その結果12種類のタイプのうち10種類の援助類型において援助経験者の方が次回の行動意思が前向きの者の比率が有意に高く、未経験者のそれを大いに上回る結果となった（Table 1）。一度経験した援助行動は、次回も同様の援助行動をすると意思表明した者が多く（延べ件数のうち87%）、反対に援助未経験者では、次回も援助に後ろ向きの者が約30%いた。

援助経験者のなかでも次回の援助について後ろ向きの比率がとくに高かったのは「援助類型 12：友人知人の相談に乗るなど精神的支援、サポート行動」であった。援助の経験実数はもっとも多い類型であるが援助効果については否定的評価や効果不明が多く、相談には乗るが適切なアドバイスができないとか、相手の状況が改善しなかったということで、このタイプの援助の難しさを示している。当然、相談の内容の軽重、コミットメントの高低などがあるので、抱えている問題が重いものほど援助が難しいことは推測に難くない。その他の援助類型については、「援助類型 7：事故状況でのけが人の介抱、救急手配、関係者への連絡等」が比率において差がなかった。これについては、援助経験者はすべて次回も援助する意思を持っているが、もともと経験者が少なく、大多数の未経験者においても次回に援助の行動をする意思は希薄という結果であった。

4. 援助行動意思の決定要因について

12 種類の援助行動については経験の有る無しにかかわらず次回の行動意思をそれぞれ 4 段階でたずねており、12 種類の行動意思を合計して援助意思得点とした。その結果、援助意思の全体平均は 48 点満点で 36.35 (SD=6.30) であった。なおこの援助意思合計得点には男女差があり、女子の方が有意に高い援助意思を持っていた (男子 35.23 < 女子 37.51 $t=2.344$ *)。

援助意思を決定する因果モデル設定のため、男女を込みにして、援助経験値、援助効果得点、社会的スキル得点 (18 項目の合成得点)、共感経験得点 (10 項目の合成得点)、共感不全得点 (10 項目の合成得点) を説明変数、援助意思得点を従属変数として重回帰分析 (強制投入法) を行った。結果を Table 2 に示す。

その結果、次回の援助意思を決定する要因としては援助経験値と援助効果得点が有効に作用しており、また、社会的スキル得点も援助意思に対する有効性を示唆している。

すなわち経験回数が多いほど次回も行動がなされやすいこと、しかもその経験が効果的であったと認識しているほど次回も行動がなされやすいことが

Table 2 援助意思得点を従属変数とした重回帰分析

説明変数	標準偏回帰係数 β	t 値
社会的スキル得点	0.126	1.683 [†]
共感経験得点	0.103	1.422
共感不全得点	-0.035	-0.503
援助経験値	0.243	3.360**
援助効果得点	0.271	3.829***

$R^2=0.210$ *** $p<0.001$ ** $p<0.01$ [†] $p<0.1$

明らかになった。これは高木（1997）のモデルを完全に支持するもので、援助を経験し援助効果を認識することで、次回の援助の積極的な動機づけをもたらしとの仮説を裏づけるものといえる。

社会的スキル得点が援助意思に影響を与えていたことは、やはり援助行動開始時のコミュニケーションが援助行動の生起において重要な要因であることを示唆するものである。どのような援助をするとよいのか明白でも、被援助者とのコミュニケーションに自信がなければ援助を思いとどまることになる。援助経験があって、以前はどういう形でコミュニケーションを始めたかの記憶が有れば、それを踏襲あるいは修正の上、次回に臨めるが、経験がない援助の行動で、始めのコミュニケーションをどうするか、その心理的負荷は案外大きいのかかもしれない。たとえば、道がわからず困っているようにみえる人にどのように声をかけるか、大きなスーパーで迷子になっているようにみえる子どもにどのように接していくか、そのことの迷いから援助行動を回避する人もやはりいるに違いない。また、援助行動が開始されてからもコミュニケーションは継続されるため、スキル能力があることで援助の行動がスムーズに進んでいくことが十分予想される。これらの点については、さらに詳細な検討が必要であろう。

それから、共感経験尺度については、援助意思に対して寄与していなかった。この理由としては、この尺度が示す共感経験が必ずしも援助の行動を起こす際の共感の感情とはやや異なるということではないかと考えている。す

なわち、援助場面における相手の感情は一般には、困惑、困窮、悲観、哀願といった否定的なものが多く、その感情を援助者がどう共感するかということであるが、喜怒哀楽すべてに対する共感経験の尺度では、関連しない感情状態も含まれており、この尺度と援助意思との関連が示されなかったものと考えられる。ただし、困窮をはじめとする否定的感情に共感するだけでなく、相手の気持ちをいろいろな面から共感できる人は、困っている人の気持ちをよく理解できるであろうことは十分推測できるところであり、共感と援助行動は密接に関連していることは今さら言うまでもないことである。

5. 次回の援助に対して後ろ向きになる理由（非援助理由）について

最後に、今回の調査で被調査者が挙げた援助に後ろ向きになる理由（以下、非援助理由と記す）についてその結果を示しておく（Table 3、Table 4 参照）。援助経験者、援助未経験者ともに、非援助理由は様々で、各援助行動類型によって異なる。そして類型による傾向もみられなかった。

しかし今回の調査で、非援助理由として全体的に多かったのは、「何となく気が進まない」とか「その時が単に面倒くさいだけ」というものであり、援助しないことに対して明確な根拠がないものが結構あるということがわかった。一方、明確な根拠のある理由としては、「援助のための時間や労力などコストがかかる」「援助するための能力や提供できる物がない」「その状況でどうしてよいかわからない」などが多く挙げられていた。高木（1987）による5つの援助抑制要因との整合性についてみると、今回の調査結果では5番目の「援助能力の欠如」の要因がもっとも数多く出てきており、実際の援助場面での援助能力不足を理由にする事例が多かったということになる。これらの非援助理由は、見方によっては、援助しないことに対する単なる合理化や後からの理由づけとも考えられる。あるいは最初から援助しないことの積極的な理由もあるのかもしれないが、いずれにせよ援助が抑制される一般的な状況要因とは別に、個別的な非援助理由が存在することを示している。

Table 3 援助経験者のうち、次の場面で援助しないとする者の非援助理由 (複数回答有り)

援助しない理由	援助場面1	類型2	類型3	類型4	類型5	類型6	類型7	類型8	類型9	類型10	類型11	類型12	合計件数
A 援助の要請がない	1				1					1		3	
B 援助する必要性を感じない					2				2		3	7	
C 援助しなくても自分は非難されない											1	1	
D 援助する相手の印象が良くない	1			1				1			2	5	
E 困わりたくなと言ふ気持ちがある					1	1	1	4		2	1	9	
F 自分には援助する能力や提供する物がない	1			2			1	1			2	6	
G 自分にはその人を援助する理由がない					1	1	1	2	2		1	7	
H 何となく気持ちが進まない	3	2		3	3	3	4	2	2		2	19	
I 偽善者のような気持ちになる		1		4	1	1			1	1	2	10	
J 共感することができない		1			2					1	3	7	
K その状況でどうしてよいかわからない									1		2	3	
L 過去に援助したこと嫌な記憶がある							9	2	1	1	2	14	
M 他の人も援助できるはず										1		1	
N 援助される側も努力すべき	1			1	1	1	2	2	2		1	8	
O その時が単に面倒くさいだけ	2	1		8		8	1	3	2	3		20	
P 自分は思いやりのある性格ではない					1			1				2	
Q 人前での援助は恥ずかしい感じがある	1			1								2	
R 自分だけ責任がかかりそうで嫌だ									1	1	2	4	
S 援助する相手にもともと原因がある話だ								2			2	4	
T 後々まで面倒なことに巻き込まれる							4	3	3		1	9	
U うまくやる自信がない				2				2	1	1	4	10	
V 援助のため時間や労力などコストがかかる		1		1	1	4		1		3		11	
非援助 合計数	10	6	0	1	15	25	0	24	28	5	25	23	162

Table 4 援助経験者のうち、次の場面で援助しないとする者の非援助理由（複数回答有り）

援助しない理由	援助類型1	類型2	類型3	類型4	類型5	類型6	類型7	類型8	類型9	類型10	類型11	類型12	合計件数
A 援助の要請がない	2		4	8	12	2			5	1		1	35
B 援助する必要性を感じない	4	5	3	5	5	1	2	5	11	1	1	1	44
C 援助しなくても自分は非難されない	1	2	1	1	3	1			2				11
D 援助する相手の印象が良くない	2			1	1			1	1				6
E 困わりたくないと言う気持ちがある	7	5	7	7	7	3	2	3	4	1			46
F 自分には援助する能力や提供する物がない	7	6	9	17	15		4	1	3	1	2	2	67
G 自分にはその人を援助する理由がない	4	3	2	5	4	1	1	2			1	1	24
H 何となく気持ちが進まない	13	15	11	18	21	6	1	4	11		2	1	103
I 偽善者のような気持ちになる	8	3	4	5	5	1		1		1			28
J 共感することができない	4	1	2	1	4	1			1				14
K その状況でどうしてよいかわからない	2	7	13	22	7	2	6	1	2			1	63
L 過去に援助したことで嫌な記憶がある							2				1		3
M 他の人も援助できるはず	2	1	2	3	1	2	2						13
N 援助される側も努力すべき	5	2	1	3	3		1	2	5			1	23
O その時が単に面倒くさいだけ	10	12	9	14	15	11	3	1	9	2	5		91
P 自分は思いやりのある性格ではない	6	6	2	4	6	1	2	1	1	1	2	1	33
Q 人前での援助は恥ずかしい感じがある	4	2	1	6	4								17
R 自分だけが責任がかかりそうで嫌だ	3	1		4	1		1	1	7	1	1		20
S 援助する相手にもともと原因がある話だ	1	1	1						2				5
T 後々まで面倒なことに巻き込まれる				3	1	1	2	1	3				11
U うまくやる自信がない	7	12	10	18	13		10		7	1	1	2	81
V 援助のため時間や労力などコストがかかる	13	12	14	14	12	5	1		2	1	1		75
非援助 合計数	105	96	96	159	140	38	38	26	76	1	17	11	813

今後の展望

先に述べたように、援助をすべき場面、あるいは援助が望まれる場面で、援助することよりも援助しないことの方が実態としては多く、それだけ援助をしない理由もあるはずである。一連の援助行動研究では、援助が生起する要因や援助の行動そのものに焦点が当てられてきたが、援助が起きないことや援助の失敗や不適切な援助事例にも焦点を当てて、人はなぜ援助をしないのかということをさらに明らかにしていく必要があると考えている。

ところで、街の中では、他者と下手に関わると何をされるか分からないといった自己防衛からか、見ず知らずの人同士のちょっとしたコミュニケーションが減っている。余計なコミュニケーションはしないように他者との関わりを回避する人が増え、温かい人間関係や社会を築いていくことが難しくなりつつある。社会的迷惑行為の研究が多数見られるのもこの点を裏づけているのではないだろうか。援助の行動は二者間の対人相互作用であって、ほとんどの場合、直接的なコミュニケーションを介した行動である。援助行動をスタートさせるには最初のコミュニケーションが必要になるのだが、今回の調査で社会的スキルの有無と援助意思の関係が示唆されたことにより、援助すべき場面でのコミュニケーションをどうしてよいかわからないから援助しない、またはできないということが潜在的にあるのではと推測する。

今後の課題としては、援助すべきという規範は持ち合わせていてもスキルがないから援助行動をしないという人たちの存在を明らかにしながら、実質的な非援助決定の過程をさらに詳細に見ていくことが挙げられる。援助のスキルとは何か、援助行動のコミュニケーションとは何か、援助者と被援助者の意思疎通の問題などが課題になってくると考えている。

引用文献

- Eisenberg, N. & Mussen, P. H., 1989 *The roots of prosocial behavior in children.*
Cambridge university Press.
- 角田豊 1994 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み 教育心理学研究 42, pp. 193-200.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する一向社会的行動の心理とスキル 川島書店.
- latané, B. & Darley, J. M., 1970 *The unresponsive bystander : Why doesn't the help ?*
NewYork : Appleton-Century-Crofts.
- 邦訳 竹村研一・杉崎和子 (訳) 1997 冷淡な傍観者一思いやりの社会心理学—ブレーン出版.
- 松井豊 1989 援助行動の意思決定過程に関する研究 東京都立大学博士論文.
- 松井豊 1998 援助とソーシャル・サポートの研究概略 松井豊・浦光博編 人を支える心の科学 (pp. 2-17) 誠信書房.
- 松浦均 1990 「寄付行為」と「募金活動」の関係について 日本グループ・ダイナミックス学会第 38 回大会発表論文集 pp. 171-172.
- 高木修 1987 非援助動機の構造とそれに基づく非援助行動の特徴づけ 関西大学社会学部紀要, 19 (1) pp. 27-49.
- 高木修 1997 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要 第 29 巻第 1 号 pp. 1-21.

(2003 年 4 月 21 日 受理)